



-BMX 広報資料-

- ① アーバンスポーツとは
- ② 自身が行なっている体験会等
- ③ パークを作るメリット

①アーバンスポーツとは

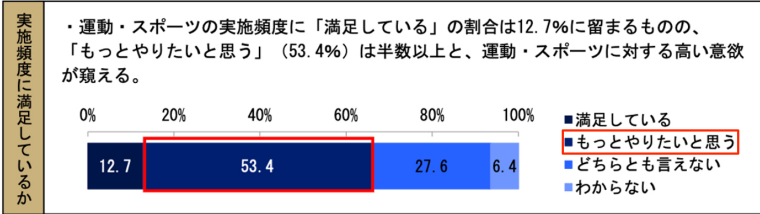
アーバンスポーツは「ライフスタイルスポーツ」であるという特徴から、順位を争うことよりも、自らが楽しみ仲間や観る人たちも一体となって楽しむことが優先される。そのため、アーバンスポーツの会場はフェスティバル化され、観客もアスリートとともに楽しむことができるものがアーバンスポーツ。

アーバンスポーツの認知度が高くなったきっかけは、TOKYO2020でスケートボードとBMX が初めて起用されたこと。最近では超有名ヒップホップアーティスト、AK69さんが小牧市のスケートパークにジャンプ台を寄贈したことで話題になっている。

そこで子どもたちのBMX、スケートボードなどのアーバンスポーツへの認知度が上がり、競技人口が増えている現状ではあるが、まだ見る機会、体験する機会、練習場所、全てにおいて少ないことがスポーツ庁のアンケートのグラフからもわかります



-愛知県のスポーツ推進計画の表を出しています-



【調査③ スポーツに関する団体、施設等へのヒアリング調査】の結果概要

【スポーツ実施率】

○競技的なスポーツだけでなく、スポーツを幅広く捉える形で、県として取り組んでいただきたい。ウォーキングや体操など、気軽に身体を動かすこともスポーツであると打ち出すことで、「これならできそうだ」「やってみようかな」という気持ちにつながるのではないかと

【地域スポーツ】

○どのようなスポーツクラブにしたいのかを地域ごとに判断し、展開してもらいたい。地域住民が主体的に関わり、その地域のスポーツクラブの在り方を決めていくプロセスが求められる

【大学スポーツ】

○大学としては、資金面等で支えていただきたいという思いはあるが、逆に大学の資源（人や施設）をどのように活用できるかを検討していく必要がある

【新技術の活用】

○スポーツ観戦については、ライブ感を味わわせることが重要かと思う。新技術を活用することでそれが実現しやすくなっていくと思う。スポーツの魅力を感じることができれば、“する”スポーツにつながっていくのではないかと

【アジア大会】

○アジア競技大会を活用して、水素バスの運行や観光MaaS等、新技術のショーケースとすることができる。関心を示す企業もあるのではないかと

【スポーツツーリズム】

○スポーツツーリズムは目的旅行であるため、目的（そこに行く理由）やモチベーションを作り出さなければいけない。例えばマラソン大会であれば、今後生き残っていくためには景色やホスピタリティといった要素がこれまで以上に求められることになるだろう

【アーバンスポーツ】

○アーバンスポーツをする場所があれば、例えば公共空間でスケボーをすることで生じている負のイメージも払拭できる。オリンピック選手の輩出にも繋がるかもしれない。また、都市の魅力向上にも繋がる

【共生社会】

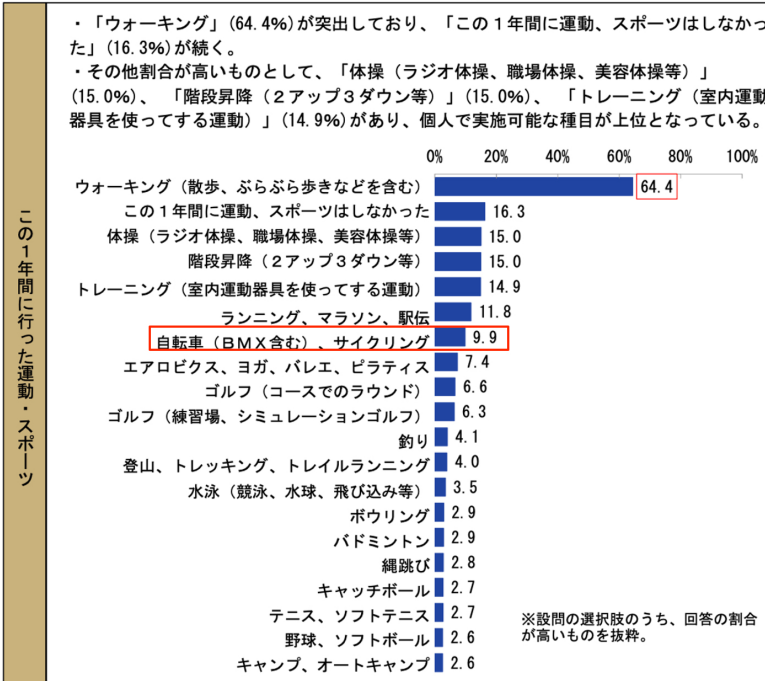
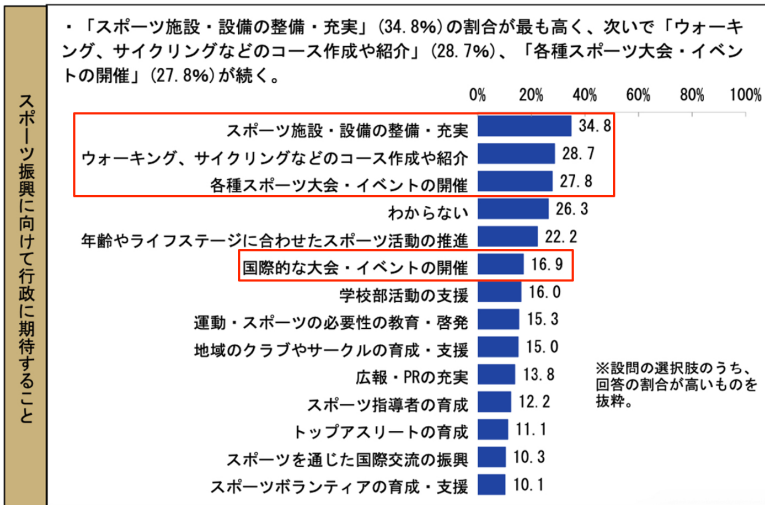
○地域に健常者と障がい者が一緒に活動する拠点がいないことが課題である。もっと身近なところで健常者を含めた交流活動やレクリエーションに取り組むべきだが、現状そのような場がない。そのような場づくりが、スポーツの普及・振興の土台になる
○障がい者スポーツについては、学校を卒業した後に継続できないケースが多いことが非常に残念である。卒業した後、競技を行う場がなく途絶えてしまう

【スポーツ施設】

○アジア競技大会に向けて、スポーツホスピタリティを高められる施設があると良い

【スポーツボランティア】

○応援してくれる方は多いと思うため、いかにきっかけを作り、いかにモチベーションを維持していくのが重要である。東京オリパラの直後であり、またアジア競技大会も控えているため、モチベーションにつながる



アーバンスポーツツーリズム研究会 参考資料⑤

3-1. 第1回アーバンスポーツツーリズム研究会議事要旨

<FISEワールドシリーズ広島概要>

- ・FISEワールドシリーズ広島は2019年に2回目を実施し、39か国からトップ選手528人が参加（うち日本人296名）した。来場者は2018年が8万6000人、2019年が10万3000人となっており、今年開催できれば15万人を期待していた。
- ・広島は国際的な平和都市として世界に知れており、海外でも広島ピース&スポーツという高評価を得ている中での開催となった。
- ・来場者内訳としては、県外からの来場者は約20%、総来場者においては男性56%、女性41%、10代が約30%、30代までが約70%と若い傾向にある。
- ・ボルダリングやBMX、スラックライン、パルクール、トランポリン、スケートボード、バトントワリング、けん玉などの体験を実施。併せてe-sportsも実施し、ネットやAbema TVでの配信も行った。
- ・アプリを使って入場者情報の記録をデータベース化している。
- ・広島県の経済波及効果は約6億8000万円と推計している。

Ⅲ-1. ツーリズム振興の視点

アーバンスポーツツーリズムに取り組む目的は、地域の活性化、地域経済の振興である。かかる観点から、各地域におけるアーバンスポーツツーリズム推進に向けた取り組みの視点を整理する。

1. ベースとなる「する」人の拡大

- ・アーバンスポーツは、遊びから派生したスポーツ、運動であるから、「楽しさ」を基本として、普及させることで、スポーツ離れに一石を投じるものと期待できる。
- ・スポーツを楽しむ子供を増やすための環境整備も検討してはどうか。

2. 「する」「見る」の連携による需要拡大

- ・FISE広島やカメラA-SIDEといったアーバンスポーツのピックイベントでも開催を知らない人が多いというのが現状であり、情報発信の強化が求められている。

・「する」競技人口は少数であり、ツアービジネスの対象となるボリュームすらないものも多い。現状では、ツーリズム（旅行）としてビジネス化させるにはハードルが高く、まずは存在自体を知ってもらう取り組みや体験機会づくりが重要ではないか。

・需要喚起を図る情報発信を含めた仕組みづくりを検討してはどうか。例えば「アソビュー！」を利用して、お出かけが好きなユーザーに訴求するという方法が考えられる。有名選手に挑戦できる特別イベントや、オリンピック選手が教えてくれる教室などを開催し、スポーツの認知や体験者を増やすことが期待できる。

・また、スポーツをできる場所を知らない、そもそもきっかけがないことも課題として想定される。「できる場所」「教えてくれる人」「それを予約できる状態」を揃えた情報を発信することで、長期的には自ずと利用者が増えるようにも考えられるのではないか。

3. 他のツーリズムアイテムとの連携による需要創出

- ・ツーリズム需要を喚起するためには、アーバンスポーツ単体ではなく、各地域の観光資源、スポーツを含めた他のアクティビティとの組み合わせを検討する必要があるのではないか。

4. ワールドカップ等ビッグイベント開催への支援

- ・競技のレベルを高める国内競技大会（クラスター大会）を創造し、国内各地を転戦できるようなシリーズ化を図ることで、「みる」機会を創出することも重要な目標と考えられる。

・世界から注目されるレベルの高い競技イベント（大会）の開催はもとより、例えばアーバンスポーツの学生イベントの開催を推進することによっても、全国の学生交流というツーリズム需要を喚起できるのではないか。

5. 地域活性化の視点からの取組

- ・遊水池や未利用施設をアーバンスポーツの活動フィールドとして活用することで、地域振興に寄与できるものと考えられる。街中の空き店舗等を活用すれば、街の賑わい再生にも貢献できるのではないか。

・道の駅などと組み合わせた活動は、子供に付き添う保護者、祖父母を巻き込み、買い物、飲食を伴う消費を喚起することも期待できる。

Ⅲ - 3. アーバンスポーツの活用展開

アーバンスポーツは、若者のスポーツ離れが危惧される中、従来のスポーツや体育の枠組みに縛られない遊び感覚のアクティビティとして、若者や子供を中心に広がりを見せており、多様な効用（効果）が考えられる。

1. 若者や子供、さらには高齢者にも対応

近年、女性用アスレチックジム（教室）は中高年女性をターゲットとして急拡大した。これと同じように、若者、子供を中心ターゲットとした需要拡大も期待できるのではないか。

・ パルクールは、護身術的な体を守る動作を基本としているから、子供や高齢者の日常生活による事故防止にも役立つものとして、今後広く普及する可能性がある。

2. 遊休施設や未利用地の活用

・ アーバンスポーツの中には、特殊な設備などを必要としないものもあり、利用されていない空間、商店街・中心市街地・大規模商業施設などで発生している空きスペースの活用にも適している。

・ これら街中におけるアーバンスポーツの活動場所の確保は、街の賑わいの再生、中心市街地の活性化にも寄与する可能性を持っている。

・ アーバンスポーツ普及の課題として、活動場所や教室事業がないことなどが指摘されており、街中の遊休施設の活用は適していると考えられる。



札幌大学では倉庫となっていたプールを、スケートボードパークとして再生し、活用されている。この事例から美幌町のポール活用が検討されている。

3. 総合型地域スポーツクラブなどの自主事業に活用

・ 遊びの要素が強いアーバンスポーツは、従来の地域型健康普及事業とは異なり、民間ベースの有料事業としての抵抗が少なく、非営利組織の自主事業としての可能性も有しているものと考えられる。

・ 事例として、二子玉川の商業施設では、子供向けパルクール教室が開始されている。子供だけではなく、老若男女を対象とした遊び感覚の強い教室として、今後広がる可能性を秘めている。

4. アーバンという言葉に拘らず、ローカルに活用

・ 現在、アーバンスポーツに取り組む自治体の多くは、比較的都市の中心から離れた自然環境豊かな場所に施設を整備する傾向にある。

・ この背景には、人口減少や若者の流出に対する危機感が存在するケースが多い。アーバンスポーツの本来の発生要因は、街中での遊び（自転車やスケートボード等）であるが、わが国では、アーバンスポーツの取組を通じて、若者を呼び込む、地域活性化の手法として既に定着し始めていると言える。

・ アーバンスポーツ需要の多い都市部において、施設の不足を指摘する声も一部あるが、都市部での施設不足状態が、地方における取組を後押ししていると捉えることもできる。

Ⅲ - 4. TOKYO2020以降のアーバンスポーツについて

これまで馴染みの少なかったアーバンスポーツであるが、TOKYO2020で採用され、これを機に露出が増えることによって、アーバンスポーツを取り巻く環境は大きく変化すると推測される。

1. アーバンスポーツの定着、急速な進展

・ TOKYO2020オリンピックの競技種目として、スケートボード、BMX、3人制バスケットボールが採用された。これにより露出が高まることは必至であるから、その種目の成績いかんでは、子供や若者を中心として、これらのスポーツ人口の急増も期待される。

・ これに伴い、アーバンスポーツの魅力に触れるイベント、アーバンスポーツを体験できる場所への需要が増えていくことが予想される。

・ パリでのブレイクダンス採用等をはじめ、世界的に注目を集める状況はますます促進されていくであろう。

2. アーバンスポーツの一般化

・ 高齢者向けのパルクール等をはじめとして、超高齢社会に向けての普及活動も増えるのではないかと。

・ 健康増進に向けた手軽に参加できるスポーツとして、普及・定着化が進むことも考えられる。

3. 地域資源と結び付いた地域固有のツーリズムの進展

・ アーバンスポーツ単体での発展ではなく、全国都市の観光特性と結び付いたツーリズムとして推進した方が良いのではないかと。

4. 急激な人気、普及の拡大による障害の派生懸念

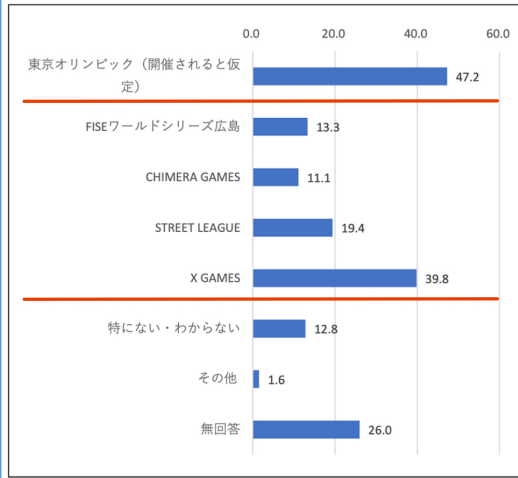
・ 「する」施設環境の整備が遅れると、街中でのルールを無視した行動にもつながり、住民の生活を阻害する要因ともなりかねない。かくして競技者と住民との間に確執が生まれれば、アーバンスポーツ、アーバンスポーツツーリズムの発展にも歯止めをかけてしまうことになるため、施設整備はもとより、公共空間における活動に対する規制緩和等も、速やかに検討した方が良いのではないかと。

例えば、TOKYO2020のレガシーとして、道路における歩行者天国や公園におけるアーバンスポーツ利用の規制緩和などに取り組むことで、多額の設備投資をしなくても、アーバンスポーツ活動の活発化、その結果として、若者の集まる街へと転換、賑わいのある街への再生が可能と考えられる。



●見たいアーバンスポーツイベント(N=578)

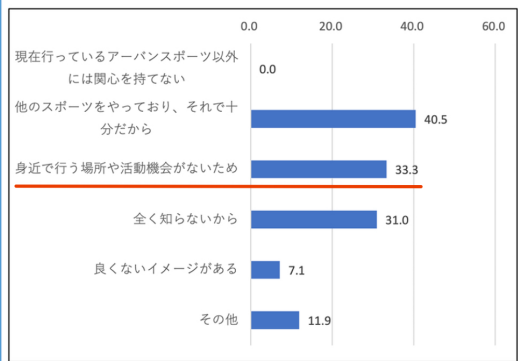
・見たいアーバンスポーツイベントとして、東京2020オリンピック47.2%と最も多く、続いてX-GAMES39.8%となっている。



●アーバンスポーツに関心がない理由(N=42)

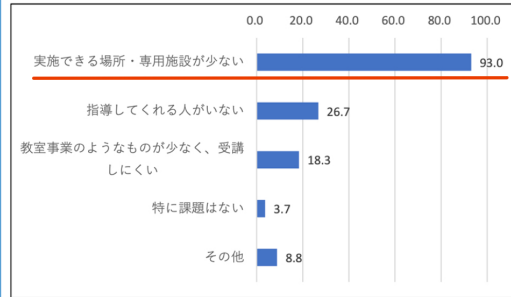
・アーバンスポーツに関心がない理由として、他のスポーツをやっており、それで十分だからが40.5%、身近で行う場所や活動機会がないから33.3%、全く知らないから31.0%となっている。

・本会の調査対象は比較的、アーバンスポーツに触れる機会のある方を対象としており、少数意見となっているが一般にはこのような課題が大勢を占めるものと推測される。



●活動上の課題(N=273)

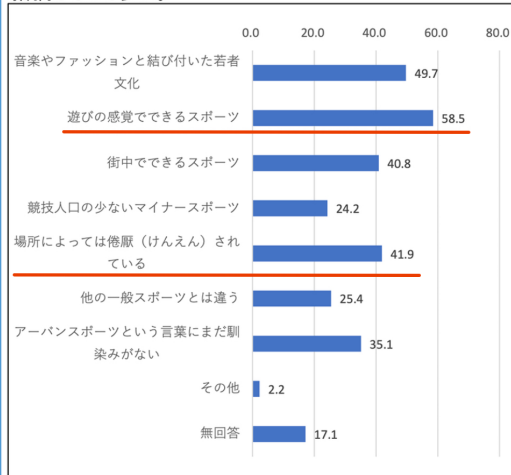
・活動をしているの課題としては、実施できる場所・専用施設が少ない93.0%、指導してくれる人がいないが26.7%、教室事業のようなものが少なく、受講しにくい18.3%、特に課題はない3.7%となっている。



●アーバンスポーツの特徴(N=578)

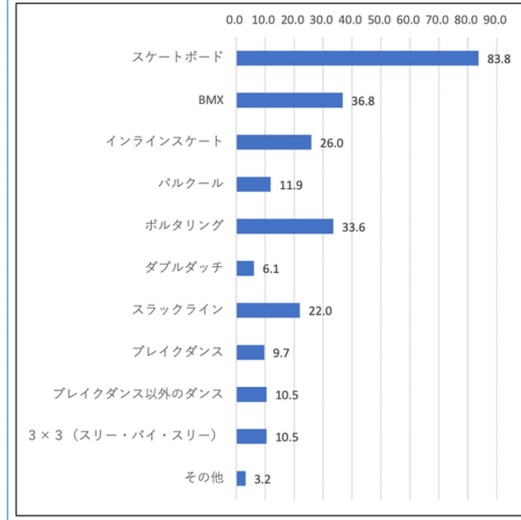
・アーバンスポーツは、遊びの感覚でできるスポーツ58.5%、音楽やファッションと結び付いた若者文化49.7%、街中でできるスポーツという特徴を指摘している。

・一方、場所によっては倦厭されている41.9%とマイナス面を指摘するものも多い。



●体験したことのある種目(N=277)

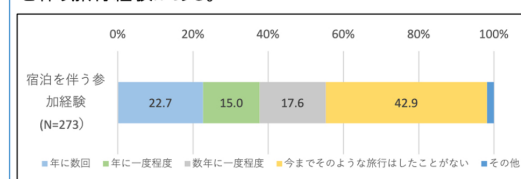
・体験したことのある種目では、スケートボードが83.8%、BMX36.8%、ボルダリング33.6%、インラインスケート26.0%、スラックライン22.0%が上位を占めている。



●競技会・大会出場のための旅行経験(N=273)

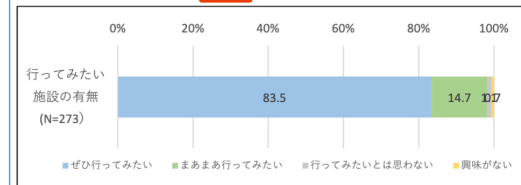
・アーバンスポーツのイベントや競技会・大会などへの出場のために、宿泊を伴う旅行をした経験では、経験がないが42.9%、続いて、年に数回が22.7%となっている。

・数年に一度までを含めると55.3%と半数を超える人が宿泊を伴う旅行経験がある。



●行ってみたい施設の有無(N=273)

・全国の施設にぜひ行ってみたい人が83.5%、まあまあ行ってみたい施設を加えると98%である。



-BMXフリースタイル 近年の成績-

-2022-

- UCI World Cup BMX freestyle 男子 優勝
- UCI World Cup BMX Flatland 男子1,2,3位 表彰台 独占
- UCI World Cup BMX Flatland 女子3位
- Fise world series GOLDCOAST 3位
- Fise world series GOLDCOAST ジュニア 男子 優勝
- Fise world series GOLDCOAST ジュニア 女子 優勝、準優勝
- Fise world series Montprillier 優勝
- Fise world series Montprillierジュニア 男子 優勝

今後の大きな世界大会の予定です ⇒

2022年の海外で行われていた世界大会では好成績を得ることが出来ました。

今年の5月に千葉県で行われる『Xゲーム』

2024年にパリで開催される『オリンピック』でも

表彰台の可能性は大いにあります。

-今後日本で行われる世界大会、オリンピック予定-

- ・ Xゲーム 2023,2024
- ・ アジアン大会（開催地/愛知県） 2026
- ・ パリオリンピック2024
- ・ ロスオリンピック2028

例えば、少し前に話題になった将棋の藤井聡太プロ。

彼が話題になることで将棋人口が1000万人を超えたと言われています。

アーバンスポーツではオリンピックで堀米雄斗選手の影響で、パーク利用者が1.5倍に増加したデータが出ております。

話題になると競技人口が増えることがデータからも分かるようにBMXも今後の大会で、競技人口が加速する予想がされています。

② 自身が行なっている体験会等

SAMURIDE BMX CLUBでは、東京オリンピック解説者であり、現在は全日本のコーチである代表が、日本全国を回りショーや体験会でBMXに触れ合ってもらう事を目的としています。



一回の体験で30分10名参加可能

一日最大80名可能

現在までに、名古屋市主催スポーティブライフ、南区主催南区民まつり、中日新聞東海ラジオ東海テレビ主催スポフェス、静岡競輪サマーフェスタ、岐阜県神戸町まつり、石川アーバンフェス、大阪住之江モーション、高岡公園体育館、京都交通安全祭、福岡ギラバズ、奥伊吹モータースポーツ、名古屋市港区主催シーパーク、で実施実績

各イベントで予約殺到

③ パークを作るメリット

1・地域活性化

他県や地方から練習目的で来る方が増えるので、経済効果が期待される

2・選手育成、強化

今後秘めた可能性を発掘し、世界大会やオリンピック等に出場する選手を輩出出来る環境の第一歩に繋がる

3・子供たちの選択肢が増える

スケートパーク一つで、年齢やジャンルを問わず交流することが出来る
今までアーバンスポーツを行う機会がなかった子供たちが挑戦するきっかけの一つになる

